

(仮称)琵琶湖博物館の設置理念と運営計画

The Ideas and Management Plan of Lake Biwa Museum

○嘉田由紀子* 中島経夫* 小笠原俊明*

Yukiko KADA, Tuneo NAKAJIMA, Toshiaki OGASAHARA

ABSTRACT: Although a number of new types of museums have been constructed in recent years, people's image about museums are still moldy and preconceived ones. Lake Biwa Museum was proposed in the 1970's and is now under construction as one of the basic institutions for the preservation of Lake Biwa environment and its culture.

This paper reports the basic objectives of its construction and some strategies for its research, exhibits, communication and information activities.

The exhibits plan is structured in chronological order, namely [Geological history of Lake Biwa], [Human history around Lake Biwa] [Environment of Lakes and Our Life] so that we can understand the past history and then think about the future. Our major concern for the management plan is how to secure the measures for participation of people in research, data collection and exhibits activity.

KEYWORDS: LAKE ENVIRONMENT, ENVIRONMENT AND MUSEUM, PEOPLE'S PARTICIPATION, NEIGHBORHOOD ENVIRONMENT, MUSEUM MANAGEMENT

1. はじめに

近年、日本各地で数かずの新しい博物館が建設されているが、多くの人たちは、まだ博物館をかびくさい、古くさいものとイメージしている。本来、博物館とは、誰もが気軽に展示や情報に触れ、その背景となっている資料や研究成果にアクセスし、そして研究スタッフと交流しながら、人びとの地域文化活動の拠点となる場所である。

滋賀県では、昭和50年代の始め、琵琶湖の環境問題に社会的関心が寄せられはじめた折、琵琶湖に関する博物館への要望が地域や学校の先生方からだされた。昭和60年度には、県立博物館の整備が決定され、昭和63年度に基本構想の策定、平成2年度には基本計画を策定し、専門スタッフも徐々に採用され、研究・資料収集活動を開始し、平成3年度には基本設計、平成4年度には実施設計にはいった。平成5年度には建築工事に着工し、展示製作も開始し、平成8年秋のオープンにむけて現在準備中である。

本報告では、現在の琵琶湖をとりまく社会環境の中で、なぜ今、琵琶湖博物館の計画が必要とされるのか、その社会的期待にはどのようなものがあるのかをまず考えてみたい。その上にたって、湖の環境にかかわる博物館づくりを進める上での基本理念、展示、研究上の工夫や、今後の運営や活動方向について、琵琶湖博物館の建設にかかわってきた研究スタッフの立場から紹介してみたい。そして、環境と人間のかかわりを考える研究あるいは交流活動拠点施設としての博物館のもつ潜在的な可能性についても、言及してみたい。

*琵琶湖博物館開設準備室 Lake Biwa Museum Project Office, Shiga, Japan

2. なぜ、今、琵琶湖博物館なのか

「琵琶湖」というと「汚い」というイメージを多くの人がもつようになったのはそう古いことではない。かつて、湖岸で汲む水をそのまま飲み水にし、朝、顔を洗いに琵琶湖に出て、その手でシジミをとってかえり、朝の味噌汁にした、という昭和30年初頭の水の清さと生き物の豊かさは確かに失われている（注1）。しかし、滋賀県土の6分の1をしめる琵琶湖は、文字通り県民の生活の中心であり、アイデンティティの象徴であることにはかわりはない。その自然は、「近江八景」にこめられたように日本の水景の代表として広く日本人に親しまれてきたが、一方で近畿圏の人びとに命の水を供給する日本最大の水資源でもある。

また琵琶湖は世界有数の古い湖、いわゆる「古代湖」のひとつで、400万年ほど前に生まれたという。およそ200万年前の湖岸を歩いていたという、すでに絶滅したゾウやシカの足跡は、今も野洲川や愛知川沿いの粘土層の中に鮮明に残っている。古くて深い湖であるがゆえに、琵琶湖には固有の魚類や貝類も多く、生物の進化の歴史をものがたってくれる。たとえばコイ科魚類の化石から、日本が東アジアの大陸部分とつながっていた時代のその仲間の系統をたどることも可能であり（注2）、地球の歴史の一端をたどることができる研究の場としても重要である。

湖の周辺には約2万年前の旧石器時代からすでに人が住み、その後の歴史の流れの中で、独自の漁労文化などを発達させた。最近発掘された粟津遺跡からは、約4500年前の湖辺の人びとのくらしのありさまを探ることができる植物や動物の遺物が、水底であるということから極めて良好な保存状態のまま発見された（注3）。その結果、当時の人たちの季節毎の狩猟採集パターンなども生き生きと描くことができる。

近世にはいと、北陸や日本海側の米や海産物などを、当時の日本の中心地である西日本の都市に運ぶ水上交通路として開発された琵琶湖には大型の輸送船として琵琶湖で独自に発達したといわれる丸子船が行き交っていた。この時代にはすでに現在の集落の多くは成熟した村落社会組織をつくっており、そのほとんどが景観としても現在まで受け継がれており、地域社会活動の基本単位となっている。滋賀県は、京都・奈良に次いで多くの指定文化財をもち、しかもその大部分が地域社会の日常生活のなかで人びとによって守られてきたという特色をもっている。

しかし、第二次大戦後の高度経済成長期の急速な工業化・都市化は、地域生活の向上をもたらし、豊かな生活を実現したが、一方で、湖をとりまく環境や生態系にも予期せぬ変化をもたらした。とはいえ、その自然的、社会的変化の実態についてはまだまだ未知の部分が多い。

このように琵琶湖は学術的、歴史文化的、資源的にも重要な存在であり、琵琶湖を守ることが私たち自身の生命と生活・文化を守ることであり、次世代への贈りものになる。琵琶湖と私たちのつきあい方についてあらためて考え、新しい淡海文化の創造という視点から新たな「湖と人間との共存関係」を築いていくことが今求められている。そのためには、過去の湖環境の変化の実態を研究調査活動によって明らかにし、その成果を県民の間でひろく共有する中で、今後のより望ましい湖と人間のかかわり方を地道に模索していく必要がある。琵琶湖博物館はそのような社会的状況の中で、立案され、計画がねられてきた一連の県立機関のひとつとして位置づけることができる。

3. 琵琶湖博物館の基本理念

上にのべたような琵琶湖の価値は、必ずしも私たち自身に強く自覚されているわけでない。むしろあるのがあたり前ということで、その価値をないがしろにしてきた側面もいえない。そこで、琵琶湖博物館では、上記のねらいを達成するための博物館施設はいかにあるべきか議論を重ねる中で、次の3点を基本理念として、特色ある博物館づくりを目指そうとしている。

3.1 未知の世界を知り、成長・発展する博物館（深く考えて広く調べる）

新しい博物館イメージ醸成のためにも、訪れるたびに新たな発見ができ、くりかえし訪れたくなるような動きと楽しみのある博物館であることをめざす。

このため、琵琶湖博物館では「湖と人間」というテーマにそって、博物館が本来もっている研究調査機能

を柱として、自然科学、社会科学、人文科学の側面から、未知の分野の研究・調査を行い、琵琶湖とその他の湖沼についての、借り物でないオリジナルな知識・情報を集積し、それらが展示や交流活動に反映できるような博物館をめざす。

これらの研究調査を基盤に、将来的には、地球規模での環境保全や生物多様性の保全、さらには文化の固有性を理解するための研究を充実させることにより、生物多様性研究の役割の一端をにうことも期待される。

3. 2 魅力ある地域への入口としての博物館（フィールドへの誘いの場）

博物館を訪れることで、人びとの関心が自身の生活の場や地域にむかうきっかけとなるような博物館となることをめざす。

琵琶湖とその集水域は、長い時間的发展のなかで、自然の生態系、自然と人との葛藤の歴史をつつみこんだ場であり、目にみえる具体的な事物の背景に、目にみえない未知のかかわり方がかくされている豊かなフィールドである。琵琶湖博物館では、魅力的な発見や創造は現場のフィールドから生まれる、という理念のもと、地域での研究活動や交流活動の入口となるような各種のプログラムを企画し、実践できる場とする。

また日本の湖沼をはじめ、アジア地域、世界各地にも魅力に富む湖沼地域のフィールドがあり、それらのフィールドとの比較研究により、琵琶湖の価値や意味、さらには湖と人間とのつきあい方も理解されるであろう。

3. 3 幅広い利活用と交流を大切にする博物館（広く伝えて深くかかわる）

多くの人びとが博物館を日常的に利活用できるかどうか、博物館の魅力ををはかるモノサシとも言える。

琵琶湖博物館は展示品を観覧するためだけの施設ではない。一般の人たちだけでなく専門家もふくめて、あらゆる人びとが展示や交流・サービス活動、研究・調査活動などの博物館活動にかかわり、楽しみながら学び考え、出合いの場となるような、またそのことが博物館の成長、発展につながるような、人、物、情報が交流する場をめざす。

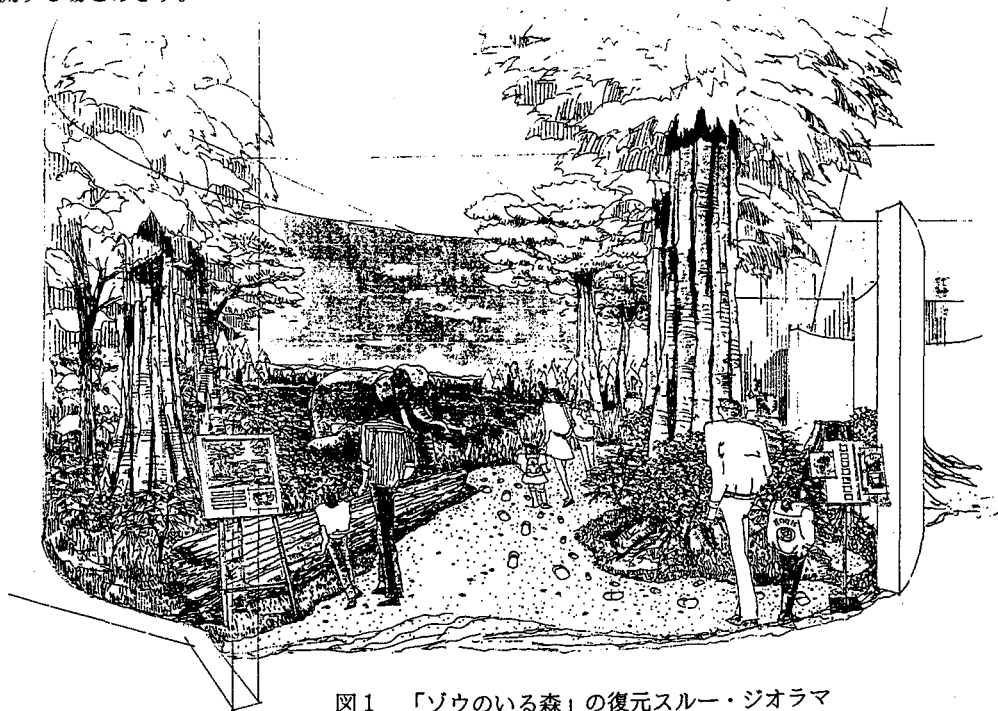


図1 「ゾウのいる森」の復元スルー・ジオラマ

4. 琵琶湖博物館の展示計画—特に環境展示とのかかわりで

博物館でまず多くの人々が接するのが展示である。琵琶湖はいわゆる博物館が扱う「モノ」ではない。自然的存在であると同時に、社会・文化的存在でもあり、私たちの生活環境そのものである。そのような「多義的・複合的環境としての琵琶湖」をいかに総合的に研究し、展示や映像として表現するのか、博物館準備室では研究者、地域の人たち、行政関係者など多方面の人たちのアドバイスをいただきながら、常設展示では、時間軸で辿る展示構成を考えた。

まず、悠久の自然物として数億年にわたる自然の歴史をたどる「びわ湖のおいたち」展示が導入部分となる。10の8乗の時代である。次に数千年にわたる人と湖とのかかわりをあらわす「人とびわ湖の歴史」、これは10の3乗の時代である。そして現在の琵琶湖の環境と人びとのかかわりをしめす「湖の環境と人びとのくらし」、これは10の1乗の時代である。

言いかえるなら、「琵琶湖」を現在社会的問題となっている、狭い意味での水汚染などの環境問題の対象としてのみとらえるだけではなく、数億年の時間軸の中での自然のシステムとして、また数万年の時間軸の中での人とかかわりのシステムとして琵琶湖をとらえるようにした。そのような長い時間軸の中ではじめて琵琶湖のもつ自然的、文化的価値が発見できると判断したからである。

それぞれの展示室の大テーマは以下のようにになっている。

まず、「びわ湖のおいたち」展示室では、およそ2.5億年前の「滋賀の大地のなりたち」を導入とし、伊賀盆地にあった古琵琶湖が現在の琵琶湖として形成されるまでの歴史を「琵琶湖のおいたち」としてたどる。ソウがこの大地を歩いていた時代の琵琶湖はどんな環境であったのか、中を通りぬけることができるスルー・ジオラマなどの工夫をすることで来館者を太古の世界に案内する(図1)。また化石や鉱物などのコレクションギャラリーを設けるとともに、自然史の研究プロセスを紹介するために、研究室での活動を再現する場もつくる。

「人と琵琶湖の歴史」展示室では、時代順に「琵琶湖の湖底遺跡」「利用のはじまり(湖上交通)」「湖に生きる人々(漁労)」「水への取り組み(治水、利水)」というテーマで、実物資料や映像などで人と湖のかかわりの時代変化をしめす。特に、かつての湖上交通の中心であった丸子船は、貴重な技術を受け継いでいる船大工さんのお力により、3年がかりで復元することができ、展示室の中でその勇姿を見ることができるよう(写真1)。

現在の時代を扱う「湖の環境と人びとのくらし」展示室は、2階建てとなっており、2階部分には主に陸上部と湖辺の環境を表現し、1階部分では生きた琵琶湖の魚をみることができる「水族」展示を配置した(図2)。さらに2階から1階へのつなぎ窓をつけることで、琵琶湖の水族(魚貝類)が陸上の人間活動の影響を受けていることを象徴的に表現する。琵琶湖博物館では、展示計画を建築計画に先行させるという方式が実現し、展示理念が実現できるような建築となったことは幸いであった。

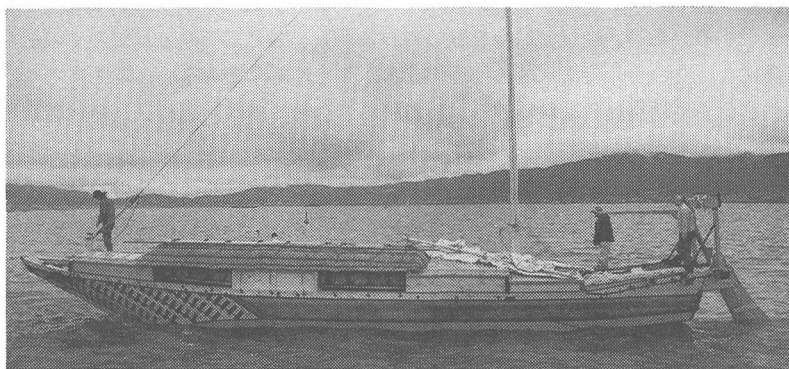


写真1 復元された丸子船

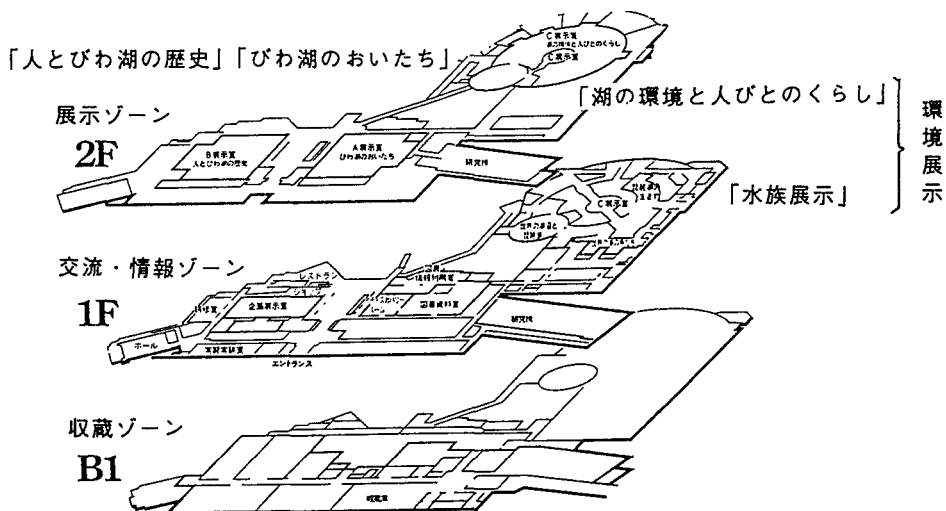


図2 博物館の空間配置と展示室の位置



図3 「琵琶湖盆地を歩いてみよう」イメージ図

また陸上についての環境展示では、昭和30年代以降、急速に変化した琵琶湖と人びとのかかわりの変化や、それに伴う生態系の変化を、山間部から平野部、琵琶湖という水の流れにそう空間配置の中で、「今昔比較」という手法で表現する。まず「琵琶湖盆地を歩いてみよう」（図3）では1万分の1の航空写真を床面一体にはりつめ、鳥になったつもりで集水域の地理的ひろがり理解してもらい、地図まわりに「琵琶湖40年」として生活の変化を生活用具や映像で迎える。「農村の暮らし」では、昭和30年代に水道が導入される前の農村の水利用、資源利用のありさまを、まさに生活感覚でひたってもらうための復元展示を行う。その比較対象資料として、現在の水のくらしを地図と写真でたどる。「くらしまわりの自然」では人とかわってきた川岸林、ため池、水田の生態系をジオラマ表現し、人のくらしの変化が環境もかえてきたことをしめす。「漁村の暮らし」では、漁師さんが周囲の水域をどのように認識し、どのような漁法上の工夫をしているのか、また琵琶湖の魚介類の食文化の工夫にはどのようなものがあるのか、レプリカなどでしめす。「琵琶湖の環境と生き物たち」では、湖の中の生き物を映像や標本で紹介する。特に琵琶湖中のプランクトンについては、拡大立体映像を製作し、プランクトンの世界の楽しさにひたってもらう工夫をした。最後に

私たちにとっても望ましい環境とはどういうものか、来館者の方といっしょに考える「私たちの環境」コーナーを設け、将来への展望を共に語りあえる場とする。

また環境展示のまとめとして世界の5大陸を代表する特色的な湖沼の自然と文化について、映像と実物資料で表現する。これらの資料や映像は、準備室の研究メンバーが手わけをして、2年がかりで現地に出向き、調査、収集した成果でもある。

また、子供たちの環境理解や異文化理解を助け、子供たち自身が楽しめるような「ディスカバリー・ルーム」を設け、体験や参加性を重視する展示空間としている。さらに屋外には、「太古の森」や「照葉の森」の復元を計画しており、田圃と生活実験工房では、さまざまな体験型のプログラムが実現できる場としている。

博物館の目の前には、比良山や比叡の山なみを遠景として、琵琶湖そのものがひろがっており、まさに博物館は琵琶湖に親しむためのオリエンテーション・ポイントでもある。基本理念でも述べたように、フィールドへの誘いの場として、琵琶湖岸の烏丸半島は格好の場でもある。

5. 地域の人たちと共に歩む博物館

基本理念のひとつとして、私たちは、幅広い交流を柱とできるような方向を選んだ。交流場面には、地域の人たち、行政関係者、学校関係者、さまざまな人たちの参加が予想される。私たちが生活する地域環境は、過去から現在までの人と自然のかかわりをつつみこんだ現場そのものであり、日常生活の中であたり前にみえても、その気になってみると不思議な世界がひろがり、発見の素が豊富に存在する場でもある。博物館は、身近な出来事や環境を改めて見直すためのオリエンテーション・ポイントでもあると考え、以下の2点に留意して、計画づくりを行ってきた。

まず第1が調査研究や資料収集での地域の人たちとの連携である。平成4年以来、準備室では、タンボロやアオマツムシなどの帰化生物やカタツムリなどの生物の分布に関する調査研究、水辺の遊びや生活用排水の変遷などの生活文化に関する調査を地域の人たちとともにに行い、資料を整理しデータベース化するとともに、展示室での公開を計画している。これまでにのべ1万人近くの人たちが、このような調査研究に参加した(注4)(図4)。参加型調査では、まさに地域環境や地域生活のプロである人たちこそが主役であり、調査研究を通じて身近な環境に興味をもつ人たちが現在徐々に増えつつある。

また博物館がオープンした段階では、気象情報や生き物の分布など、地域での出来事や情報を博物館に寄せていただく「フィールドレポート」の人たちにより、リアルタイムに近い展示ができるような工夫をしている。

2点目の工夫は展示室である。博物館での展示は単に一方的に情報を伝達するだけでなく、来館者自身にさまざまなことを発見してもらい、またそれぞれの経験や智恵などを思いおこし、それを伝達してもらう場にもある。そのためにはできるだけ身近な話題から出発し、他地域との比較などができるような工夫をしている。さらに展示がつくられる過程や、専門研究の現場の状況を見ていただくようなプロセス展示も計画し、専門家の研究も決して遠い世界の出来事ではないことを示そうとしている。

上のような地域の人たちの参加を保証するには、バックにそれぞれのテーマ毎の専門家が是非とも必要である。地学、生物学、歴史学、社会学、工学など個別の学問領域の専門家はもちろん、情報整理や交流活動の専門家など、自らの専門的能力に自信をもてるだけの研究蓄積と経験が、逆に、地域の人たちへの開かれた精神をつくる。これまで日本の博物館はともすれば、展示や資料収集に力をいれ、研究がおろそかにされがちだった。専門家でないと追求できないテーマを追求するのはもちろん、個別の学問領域だけでは追求できない「学際的研究」、また地域の人たちとともに行う「人際的研究」は、資格や条件を問わず、意思さえあれば参加できる博物館のような開かれた施設ならではの特色となることが期待される。

琵琶湖博物館 シンポジウム

「身近な環境調査と 博物館づくり」



主催：滋賀県教育委員会事務局
(後援) 琵琶湖博物館開設調査室

図4 身近な環境調査の報告会
シンポジウムのパンフレット

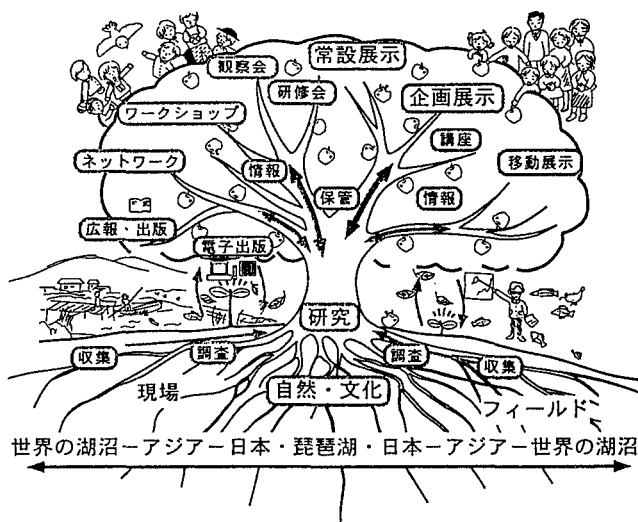


図5 博物館の活動連関図

6. 運営組織と運営計画

上のような博物館の理念と活動を実現するためにはさまざまな人的、財政的後ろだてが必要となる。現在、運営計画を策定中であり、まだまだ流動的であるが、基本的な考え方としては以下のような方向をとっている。

一般に博物館は展示活動が表に見えるが、その背景には「調査研究」「資料収集保管」「情報」「交流」という多くの活動があり、それぞれの活動は相互につながった一連のものである。たとえば、研究の成果は、展示製作や交流サービス活動の基礎になり、将来的には保存資料となり、博物館での長期的な活用がはかられる。博物館では、各種活動の＜有機的なつながり＞を引き出すという総合的な利点をもっており、それを実現できるような組織的工夫が求められる。

琵琶湖博物館では、一連の活動を樹木にたとえて有機的なつながりを考えている。その活動連関を模式的に表現したのが図5である。

まず、博物館活動をたえず成長・発展させるためには、日常のたえない研究・調査活動は欠くことができない。樹木のたとえでは、研究・調査活動は、大地に深く食い込み、“知”という水分と栄養分を汲み上げる根である。琵琶湖博物館では、研究にふたつの柱を考えている。ひとつは生態系の復元や、自然と人間のかかわりに関して人文系、自然系の研究者が共に参加し、学問分野の壁をこえて行う「学際的総合研究」である。また前述のように、地域の人たちとともに身近な環境調査などを継続的に行う人際的な「参加型総合研究」がもうひとつの柱である。さらに研究スタッフとして行政現場の経験者に参画してもらうことで、博物館活動と地域環境のあり方を実践的に考えるための道が開かれることも期待される。

研究活動が樹木の根であるなら、野外観察会や講座の開催、広報・出版活動などの交流・サービス活動は、その花や果実を楽しむ活動そのものである。私たちは、多くの博物館で言う「普及・啓発」という考え方を一歩すすめて、さまざまな分野の人たちが出会い、交流し、相互に成長しあえるような双方向のかかわり方を理想とし「交流活動」と名づけている。すでに準備室時代から「準備室なれど博物館」という精神で、各種の野外観察会や出版活動などを行っている。また、展示室も一方的な伝達ではなく、意見を交換しあう場

として位置づけ、展示室での交流活動も計画している。さらに情報ネットワークを通じての出会いも、現代の若い世代などには求められていることからパソコン通信ネットの開局も計画している。

情報機能は、樹木でいえば、目にみえない水や栄養分の流れをたもつ道管などの輸送系統にあたる。琵琶湖博物館では、展示資料の収集にとどまらず、琵琶湖を中心として、日本、世界の湖沼に関する情報を収集、データベース化をはかり、人びとに加工、提供するための情報システムを構築する。地域の人たちとのネットワーク化にあたっては、「提供」とあわせて、地域の人たちの知識や経験を「受信」し、それらを「蓄積」する場（情報サロン）をつくることが大切である。また五感に訴えるわかりやすさを増すための工夫として、動画、静止画、地図、音声などをくみあわせたマルチメディアシステムの開発をはかっている。

収集・保管は、樹木にたとえれば、根や幹の部分であり、研究活動と並行して水分や栄養分を吸収し蓄える役割を果たす。琵琶湖博物館は、日々琵琶湖とその集水域、日本、世界の湖沼地域に関する自然と文化にかかわる物、情報を収集・整理し、館のエネルギー源として蓄え、活用できる状態に整備していくことが必要である。

上のような計画は、実現しつつあるものもあり、全く青写真段階のものもある。まさに、「仏つくって魂をいれる」のは、開館後の日常的な博物館活動そのものにかかっていると考えている。開館はその出発点でしかない。「湖と人間」という、博物館としては異例の対象とテーマをかかえながら、徹底的に琵琶湖にこだわりながら、そのつきぬける先にグローバルな環境を考える拠点となれるよう、スタッフ一同精神をかたむけている。そして博物館が本来もつ潜在的な可能性についても挑戦してみたい。関係の皆さまの積極的な参加とご助言をお願いします。

（注１）嘉田由紀子『生活世界の環境学－琵琶湖からのメッセージ』農山漁村文化協会、１９９５年

（注２）滋賀自然史研究会『琵琶湖の自然史』八坂書房、１９９４年

（注３）琵琶湖自然史研究会・財団法人滋賀県文化財保護協会『粟津湖底遺跡』１９９２年

（注４）琵琶湖博物館開設準備室『身近な環境調査と博物館づくり』１９９５年１月２１日、シンポジウム資料。